

ネラ・ラーセンの『パッシング』： 黒人女性のパッシングと連帯、そして成功

大 橋 稔*

Nella Larsen's *Passing* :
Passing, Solidarity, and Success for African American Women

OHASHI Minoru*

The purpose of this paper is to describe a way of achieving success for African American women. Through some analyses of Nella Larsen's *Passing*, I describe that the passing is a kind of solidarity which connects African American community and "passed" people. Moreover, I point out that creating a successful image of their own is the utmost of importance for African American women so that they achieve success by their own hands.

* 城西大学助教

はじめに

奴隷制時代、主人は自らの性の捌け口として女性奴隷を利用するために、また奴隷を再生産するために女性奴隷を性奴隷とし、彼女たちの性を利用してきた。その結果、黒人と白人の「混血」が進み、夫と共に逃亡した後に奴隷体験記を残した元奴隷女性エレン・クラフト (Ellen Craft) のように、白人のような肌の色をした黒人が誕生した。彼／女たちの存在は黒人／白人という境界線を攪乱し、黒人とは一体誰のことなのかという問いを投げかける。

奴隷制時代も解放後も、肌の色が白い黒人は、黒人を抑圧する社会構造の中で「より良く」生きるための戦術として肌の色を利用してきた。その一つが、黒人であることを隠し白人であるかのように振る舞うパッシングだった。クラフトは白い肌を利用して白人男性に変装して奴隷の身分からの逃亡を成功させた。またより肌の白い奴隷のほうが主人の関心を引き、奴隷としては「まとも」な扱いを受けることにつながった。奴隷間の関係においても、より肌が白いほうが優れているとみなす風潮もあった。一方解放後は、白人になりすますことによって白人社会に入り込み、白人としての特権を享受し、職を得るなどして、多くの黒人に課せられていた貧困という問題から抜け出すことに成功する者も居た。

合衆国において黒人であるとみなされることの根拠は、肌の色が黒いということではない。彼／女たちの血に、黒人の血が含まれているか否かによって判断された¹。このことは、白人のように白い肌を持った黒人も存在したことを示している。そのような黒人たちの中には、白人として振る舞い、白人としての利益を享受する生き方を選択する者もいた。この行為は「パッシング」と呼ばれ、白い肌の黒人にとっては生き延びるためのひとつの手段でもあった。このパッシングはチャールズ・チェスナット (Charles W. Chesnutt) の『ヒマラヤ杉の陰の家』 (*The House Behind the Cedars*, 1900) やジェームズ・ウェルダン・ジョンソン (James Weldon Johnson) の『元黒人の自伝』 (*The Autobiography of an Ex-Colored Man*, 1912) などの文学作品で取り上げられてきた。そしてジェシー・フォーセット (Jessie Redmond Fauset) は『プラム・バン』 (*Plum Bun*, 1929) や『アメリカ式の喜劇』 (*Comedy: American Style*, 1933) において、ネラ・ラーセンは『パッシング』において女性の視点からパッシングを描いている。

ネラ・ラーセン (Nella Larsen)² の『パッシング』 (*Passing*, 1929) に登場するのは、白い肌の色を利用して、黒人社会と白人社会の境界線を越境する黒人女性たちである。『パッシング』は従来パッシング小説という枠組みで人種問題を主に分析されてきた。しかし

デボラ・マクダウェル (Deborah E. McDowell) は「名前のない、恥すべき衝動」(“The “Nameless... Shameful Impulse”: Sexuality in Nella Larsen’s *Quicksand and Passing*,” [1986] 1995) において、アイリーンとクレアのレズビアン的関係を『パッシング』の中心的なテーマとして読み解く試みを行い、その後特にセクシュアリティ研究の対象として、登場人物の関係性に着目する研究が多くなされるようになっていく³。このような研究の動向を踏まえつつも、本稿では、パッシングという行為と、白い肌の黒人の社会的意味に焦点を当てる。なぜなら、パッシングをめぐる顛末の分析を通じて、黒人女性が合衆国社会において成功を手にするための課題を読み解くことが本稿の課題だからだ。

パッシングとは

『パッシング』にはパッシングが可能なほど肌の白い黒人女性が三人登場する。この物語の主人公であるアイリーン・レッドフィールド (Irene Redfield) とクレア・ケンドリー (Clare Kendry)、そして二人の知人であるガートルード・マーティン (Gertrude Martin) である。彼女たちは結婚しているが、三人の結婚はそれぞれに異なっている。アイリーンは黒人男性ブライアン (Brian Redfield) と結婚し、黒人として生活をしている。ガートルードは白人男性フレッド (Fred Martin) と結婚しているが、フレッドとその家族、親しい友人は彼女が黒人であることを知っている。つまり彼女は、家族や友人には黒人であることを明かしながら、白人社会においてはその素性を隠して生活していた。最後にクレアの場合は、夫であるジョン (John Bellew) にも彼女が黒人であることを隠したまま結婚しており、結婚生活においても社会生活においても素性を隠しながら白人として生活していた。

さてこの三人の会話から、パッシングに関する苦しみのひとつを読み取ることが出来る。それは妊娠・出産による苦悩である。まずこの苦しみを語り出したのは、クレアであった。彼女は娘のマージェリー (Margery) が生まれてくるまでの九ヶ月間の妊娠中の苦しみを「恐怖で死にそうであった」(143) と言う。クレアに同意しながらガートルードも「あなたたちは私だって死ぬほど怖がらなかったなんて思わないでしょうね」(144) と言う。この二人が話す死ぬほどの恐怖とは、生まれてくる子どもの肌の色を心配しての恐怖であった。自分の肌が白人のように白かったとしても、子どもの肌の色が白いとは限らない。肌の黒い子どもが生まれてくれば、それは彼女たちのパッシングが露呈することを意味していた。そしてその恐怖ゆえに、もう子どもは欲しくないと言うのだ。

肌の黒い子どもが生まれることに対する二人の恐怖に関連して、肌の色あるいは黒人であることの問題の深刻さについて、その構造を作り上げ、差別をする側である白人がいかに鈍感であるかをラーセンは描き出している。ガートルードは、恐怖を感じる彼女に対する家族の反応を紹介している。夫フレッドや彼の母は、彼女が恐怖を感じているのは妊娠によって気が立っているだけとしか見ていなかった。そして彼はガートルードに対して、子どもの肌の色がどのようなものであっても問題ないから心配するなと伝える。しかしガートルードは、黒人として生きることの困難さを知っているからこそ、「黒い肌の子どもを欲しいとは誰も思わない」(144)と言うのである。

差別する側の白人が差別に鈍感であることをラーセンは別の個所でも指摘している。アイリーンとクレアが再会した場面である。この時アイリーンは、真夏の暑さを避けるためにドレイトンというホテルの喫茶店にいた。ドレイトンは白人専用の施設⁴であるが、肌の白い彼女は一時的にパッシングをして入店していた。お茶を飲みながら考え事をしていた時、不意に彼女は一人の女性から向けられた視線を感じ取る。彼女は自分が黒人であることがばれてしまったのかと考えるが、そんなことはない、馬鹿げていると思い直す。なぜなら「白人はこのようなことに対しては鈍感」(126)だからである。

その後アイリーンに視線を送っていたのが、旧友のクレアであることがわかる。この時アイリーンはクレアに対して、パッシングしてまったく知らない環境で生活することに対して質問をする。この質問にクレアは、必要なのは少しの度胸だけであり、知らないグループに入るのであれば、黒人のグループに入り込むよりも白人に入り込むほうがはるかに簡単だと答える。またその理由を、「おそらく白人のほうが数が多いから、あるいはおそらく彼らは守られていて思い悩む必要などないからだ」(134)と説明する。アイリーンは自分が何者かを説明しなくて済むなどあり得ないと答える。

白人社会と黒人社会の両方で生きたクレアとガートルードの経験、そして黒人社会のみで生きてきたアイリーンの経験を通じて、ラーセンは二つの社会の違いを指摘し、差別の構造に関する認識の違いを抉り出そうとした。差別される側の黒人は、差別の構造に対して敏感であり、自分たちを守るためには素性の分からない白い肌の者を受け入れることに対してはより周到にならざるを得ない。一方、差別をする側の白人は、自らの領域を侵す者などいないと考え、素性の分からない白い肌の者を受け入れることに対しては無防備となっている。それはおそらく、権力機構の中心を独占する白人は権力によって守られているために、人種が有する社会的意味とその影響に対して鈍感になっているためである。

パッシングするとは如何なることなのか。『パッシング』では次のように示されている。

彼女〔アイリーン〕が知りたかったのは、パッシングというこの危険な行為についてである。それは、まったく異なるというわけではないが、おそらくまったく親しみが持てない別の環境でチャンスを得るために、慣れ親しんできたすべてと関係を絶つことである。(134、〔 〕内は引用者)

つまりパッシングとは、黒人であるという素性を隠し白人として振舞うことであるので、黒人としての出自を切り捨てることにほかならない。アイリーンはパッシングを「自分勝手に冷たく無情である」(121)と表している。黒人であることにこだわる彼女にとって、黒人という人種との決別を意味するパッシングを受け入れることは出来なかった。そのため彼女は、クレアにパッシングをしようと考えたことはないのかと尋ねられたとき、「いいえ。何故しなくてはならないの？」(137)と即座に答えている。

ラーセンは、パッシングをした者の経験を通じて、白人社会と黒人社会における人種差別への意識の違いを描き出し、また一義的にはパッシングという行為が自らの人種と決別する行為であることを示したのだ。しかし実際には、黒人社会からの支えや協力がなければパッシングは成立し得ないことが、物語が展開する中で示されている。

パッシングにまつわる孤独と連帯

ドレイトンでアイリーンと再会したクレアは、パッシングによって黒人であることを「やめた」にも関わらず、黒人社会とまた関係したいという気持ちを募らせていく。パッシングしているクレアにとって黒人との接触は危険を伴う行為であった。なぜならば、それが発端となり彼女のパッシングが露呈してしまう可能性があったからである。『パッシング』の舞台は、ハーレム・ルネッサンスの時代であり、多くの白人たちが黒人文化を求めてハーレムに入り込んでいる時代であった。その白人の中に紛れてしまえば問題ないとクレアは考えたのだが、アイリーンはだからこそ多くの白人の目に触れることになり危険が高まるとしてクレアに思いとどまるように忠告する。しかしクレアがアイリーンの忠告に耳を貸すことはなかった。

クレアにとって夫の留守中に黒人社会と交流を深めることを切望するのにはひとつの理由があった。「独りぼっちの魂のそばには誰もいない。本当に話ができる人は誰もいない」(169)と言う彼女は、白人社会のなかで生きることに孤独を感じていた。そしてアイリーンと再会したことで、その孤独感はさらに増し、パッシングした際に断ち切ったはずの黒

人コミュニティとの絆をもう一度復活させたいと願うようになったのである。

クレアが孤独を感じる理由のひとつに、夫ジョンが人種差別主義者であったことがあげられる。彼は黒人について「好きじゃないなんてものではありません。私は彼らを憎んでいるのです。ニグ〔クレア〕もそうです。(中略) 彼らは私をぞっとさせるのです」(148)と述べている。結婚当初は肌の色が白かったクレアであるが、時が経つにつれ肌が黒くなっていった。そのためジョンはクレアを「ニグ」(Nig)と呼んでいたのだ。彼女の肌の色が黒くなっていることについてジョンは、「君が黒人じゃないことを知っているから、君が好きなだけ黒くなくても構わない」(147)と言っている。このジョンの言葉からも、合衆国において黒人であるということが肌の色の問題ではない事がわかる。

この人種差別むき出しの発言は、アイリーン、ガートルードとのお茶会の席で披露されたものであるが、この発言はアイリーンのみならず、パッシングしたガートルードをも不愉快にさせる。そしてクレアの生活がより孤独であると感じさせることになった。パッシングは代償を払ってでも手にする価値があるものとしていたクレアはこの後、パッシングに否定的なアイリーンに書いた手紙に、「もしかしたら結局あなたの生き方のほうがより賢明で幸福なのかもしれない」(153)と綴っている。

さて先に引用したジョンの人種差別発言に対して、アイリーンとガートルードは憤慨するものの、彼の考えに対してその場で反論するようなことはなかった。ここにパッシングをめぐる黒人の連帯を読み解くことが出来る。ジョンはアイリーンとガートルードが黒人だとは知らずに自らの黒人観を披露した。そして彼は妻であるクレアもまたその黒人観を共有していると考え、その友人である二人もまた同じような考えを持っていると思っていたはずである。もしこのような状況で、アイリーンたちが異議を挟んでしまえば、あるいは黒人として発言してしまえば、それはクレアのパッシングを破綻させることにつながってしまう。そのためアイリーンもガートルードも反論しなかったのだ。

パッシングしたクレアは、黒人との絆を断ち切った存在である。しかしそれでもなお、アイリーンとガートルードは黒人の掟を守るために、黒人に対する差別発言に耐えたのである。アイリーンはパッシングについて次のように述べている。

「パッシング」はおかしなものである。私たちはそれを気に入りはしないけれど、それと同時にそれを大目に見ている。それは私たちの軽蔑を駆り立てるけれども、むしろそれに感嘆したりさえする。私たちは奇妙な嫌悪感でもってそれとは距離を置くけれども、私たちはそれを守っている。(159)

パッシングは黒人社会との繋がりを断ち切る行為であるが、その一方で黒人の連帯を守ることによって成り立つものであった。つまり黒人性を捨てた白い肌の黒人と、その黒人を守ろうとする黒人社会に残る者とは、パッシングによって繋がりが続いたのであった。

「悲劇の混血娘」の悲劇

パッシングを軽蔑し、嫌悪し、その必要性を感じず、黒人であることにこだわりを持っているかのように見えるアイリーンであるが、その実態はどのようなものであったのだろうか。シカゴの実家には家政婦が居ることから、それなりに裕福な家庭で成長したことがわかる。また結婚後はニューヨークへ移り住み、夫のブライアンは医師で、役人からもドクター・レッドフィールドと肩書きをつけて呼ばれるような人物であり、家政婦を雇うことが出来る経済状況にある。また息子をヨーロッパの学校に入学させることさえ考えることが可能な状況でもあった。さらに彼女は黒人福祉連盟の活動に関わっており、そこでは白人と親しく関わる立場であった。また家庭の中では、息子たちがセックスに興味を持つことを憂い、リンチなどの人種問題について話題にすることを嫌悪していた。

このように考えると、アイリーンがおかれていた状況は、一般的な黒人とは異なり、上流階級に属するような生活をしていたことがわかる。また彼女は、パッシングを嫌いながらも、クレアと再会したドレイトンを利用してのように、必要に応じて彼女の白い肌が有する利益を享受してもいたのである。パッシングという行為が、生まれ持った肌の白さを盾にした、人種差別のみならず経済的困窮から抜け出すための手段であったとするならば、アイリーンにはパッシングする必要などなかったのである。つまり先に引用したパッシングを「何故しなくてはならないの？」という彼女の考えは、人種にこだわるからではなく、文字通りにその必要がなかったとも考えることができる。

さてアイリーンの反対にも関わらず、黒人社会と関わるようになったクレアは、同時にアイリーンの夫ブライアンとも関係を深めていく。二人の関係に対するアイリーンの疑いが確信に変るにつれて、彼女の精神は衰弱し、崩壊していく。そのような状況の中彼女は、クレアがハーレムに出入りしていることを夫のジョンが知りさえすれば、クレアが彼女の目の前から消えてしまうだろうと考えるようになる。しかしそうなることは、クレアのパッシングを露呈させてしまうかもしれない。それは「人種に対する忠誠心」(194)に反する行為である。そのため彼女は、行動に移すことが出来なかった。

しかしアイリーンの願望が叶うときがやってくる。アイリーンが友人の黒人女性フェリ

ス・フリーランド (Felise Freeland) とダウントウンを歩いているとき、クレアの夫ジョンと出会い、ジョンはすべてを理解したのである。アイリーンはこのことをクレアやブライアンに伝えなければならないと考えるものの、結局、誰にも伝えることはなかった。この時アイリーンは、ジョンと離婚してクレアが自由になったら、ますますアイリーンの生活を脅かす存在になるだろうという、新たな不安に襲われていたのだ (197、204)。彼女は「人種に対する忠誠心」を守り、クレアの正体を暴露することはなかったが、嫉妬心からクレアの危機を知らせないことによって、忠誠を破ってしまったのである。

アイリーンがクレアの危機を知らせることができないまま参加した黒人たちのパーティ会場へ、怒りに満ちたジョンが乗り込んできた。そしてクレアは六階の窓から転落して死んでしまう。ジョンによって突き落とされたのか、状況を飲み込んだクレアが自ら飛び降りたのか。それともそのときクレアの隣に立っていて、ブライアンとの関係に嫉妬しクレアの死さえ願ったアイリーンによって突き落とされたのか。何かをはっきりと人前で語る前にアイリーンは気を失い、そこで物語が終わってしまう。またその後、アイリーンの衰弱した精神が回復したのかも分からない。

クレアの死という結末については、人種という境界線を侵犯し、さらにはブライアンとの親密な関係によってアイリーンの「幸せな」結婚を崩壊させたため、1920年代の文学的伝統から考えれば当然の罰であったと言える。まさに「悲劇の混血娘」の結末であった。その一方で、アイリーンの結末は何を意味しているのだろうか。彼女の精神的な崩壊と、もしかしたら殺人まで犯してしまったかもしれないという結末。これはアイリーンが人種への忠誠を破ったことが関係している。

前述の通り、アイリーンは黒人であることにこだわりながらも便宜的なパッシングをすることが可能であったり、すでに上流階級の生活を手に入れたりしているなど、当時の一般的な「黒人」としての生活をしていただけではなかった。黒人である彼女が豊かな生活を手にすること自体は何ら問題ないことである。しかし彼女は、その生活を守るために子どもたちの前でセックスや人種問題を話題にするのを避けるなど、白人的な価値観を無自覚に受け入れてしまっていたのである。

アイリーンの「幸せな」生活が危機に瀕していたのは、クレアが存在が原因であった。夫ブライアンとクレアの親密な関係に嫉妬するアイリーンは、クレア存在を排除したいという欲望に駆られる。この欲望を実現させることは、アイリーンにとっては簡単なことであった。なぜならクレアが黒人と親しく付き合い、ハーレムに出入りしていることを人種主義者であるクレアの夫ジョンに伝えるだけで良かったのだから。しかし彼女は人種へ

の忠誠心に邪魔され行動に移すことができない。自身の生活を守るためにクレアを排除したいという欲望と、人種への忠誠心との狭間で思い悩む彼女は、生まれてはじめて「黒人に生まれなければよかったのに」(194) と考えるようになる。ここで彼女は人種という抑圧から逃れたいと考えるようになる。それでも彼女は、少なくともクレアの正体が露呈することにつながるような積極的な行動を起こさないことによって、人種への忠誠を優先させようとしたのだ。

しかしクレアのパッシングがジョンにばれたとき、彼女は何も行動を起こすことがなかった。確かにクレアが黒人であることが発覚したのはアイリーンの責任ではなかった。しかしクレアに危険が迫っていることを知らせないという選択は、パッシングした黒人を守ろうとする黒人社会の掟を破る行為であった。そして何よりもアイリーンのこの何もしないという行為は、クレアを死へと導くことになってしまった。彼女の行為は、協力しながら抑圧的な社会の中で生き抜いてきた黒人社会の伝統を破壊するものだったのである。この黒人社会に対する裏切り行為のために、アイリーンは精神崩壊という罰を受けなければならなかったのだ。

「悲劇の混血娘」を超えて

前述のように、物語はクレアが気を失う場面で終わる。しかし実際には、さらにもう一段落が挿入されている版も存在している。そこには次のように記されている。

しばらくして、「事故死だった。そう思いたいな。もう一度、窓を覗に行こう」と見知らぬ男性が言っているのが彼女には聞こえた。(210)

『パッシング』にはパーティの様子が何度か描かれているが、そこには常に白人が参加していた。しかし最後のパーティだけは、白人が全く参加していない。途中怒りに狂ったジョンが乱入してくるものの、窓から飛び降りたクレアの周りに集まった人々はすべて黒人で、この時ジョンは既に姿を消している。この意味において、このパーティの場面は『パッシング』の世界において異質なものとなっている。この異質な空間において提唱され、かつラーセン自身によって付け加えられたり削除されたりした最終段落が果たす機能を慎重に考察する必要があるだろう。

奴隷制時代より、黒人たちは連帯することによって、彼／女たちを抑圧する差別的な社

会構造のなかを生き抜くことを志向してきた。この伝統は、現代に至るまで脈々と受け継がれている。そしてまた、より良く生きようとする仲間と協力し、互いに支え合うことが人種への忠誠心であったとも言える。これらの伝統に従って生きることを（無意識的にかもしれないが）拒否したために、アイリーンの精神は崩壊せざるを得なかった。

このように考えると、削除された物語の最後の段落は、アイリーンにとって光を感じるものとなる。真実が曖昧なままの状況において、一人の男性が「事故死だった。そう思いたいな。もう一度、窓を覗に行こう」（210）と皆に呼びかける。この「そう思いたい」というこの言葉には、皆は、あるいは少なくともこの男は、真相（クレアの自殺だったのか、それとも誰かが突き落としたのか）を知っていることを仄めかしている。そしてこの呼びかけは、それでもなおこの事件については事故死として秘密を共有し、連帯しようという呼びかけに聞こえる。

そしてこの声は意識を失いかけていたアイリーンにも届いている。つまりここで提案された連帯には、彼女も含まれているのだ。奴隷や逃亡奴隷、そして解放後に差別にさらされ続けてきた黒人たちは、傷ついた精神と身体を黒人の連帯に連なることによって癒してきた。そして今度はアイリーンもまた、彼女が壊した黒人の連帯の中に、再度彼女自身が取り込まれることによって、崩壊してしまった精神を再生させることができるのではないかとと思われる。

クレアは「悲劇の混血娘」の伝統、つまり自らの欲望のために他者を狂わせ自身の身を滅ぼす、に従って死という結末を迎える。またアイリーンの精神が回復しなければ、彼女もまた「悲劇の混血娘」の伝統に収斂される存在となってしまうであろう。しかしラーセンは、アイリーンの精神の再生の可能性を仄めかすことによって、「悲劇の混血娘」の伝統を打破する方法を描いている。つまり黒人社会の絆、黒人の連帯の中で生きていくことによって、悲劇に陥ることのない生を手にすることが可能になると示しているのだ。

成功という名の罠

アイリーンとクレアという二人の黒人女性に共通しているのは、意識的であるか否かの違いがあるものの、白人中産階級的な価値観や成功の夢⁵を追い求めていたことにある。そして彼女たちがそのような価値観に執着し、努力すればするほど彼女たちの身体や精神、生活が崩壊へと導かれていったことも共通している。

クレアはパッシングをすることによって、白人としての生活を手に入れようとした。貧

しい境遇に生まれ育った彼女にとって、当時の合衆国社会で成功するための方法がパッシングだった。彼女は望みどおりに裕福な白人と結婚し、白人としての生活を手に入れた。しかしそれはまた黒人であることを隠して生きなければならないことを意味し、彼女に孤独感を与えることにもなった。その結果、旧友であるアイリーンと再会したことによって、彼女は再び黒人社会と関係することを望むようになったのである。

クレアが黒人社会との接触を試みたことは、彼女の黒人社会への望郷の念の露呈であったと考えられる。しかしその一方で、ハーレム・ルネサンス期の白人による黒人文化への興味の表れであったと考えることも可能である。つまり彼女は黒人社会へ再帰するためではなく、彼女の孤独感を紛らわすために黒人社会へ接触したのであり、彼女の軸足は白人社会におかれていたのである。彼女の黒人社会への憧憬は、黒人文化を原始的なものと看做す白人的観点によって構築された憧れであり、当時の経済的な余裕のある白人の娯楽的な視線と同一のものであった。そのため彼女の行動は、その結果もたらされるかもしれない黒人社会への影響、特に旧友であるアイリーンと彼女の家族にもたらされるかもしれない影響についての配慮が欠落していた。

クレアの配慮に欠けた行為によって、アイリーンの精神と生活は崩壊してしまうことになる。彼女の精神的な崩壊は、クレアと夫ブライアンとの関係を疑うことに端を発しているように思われる。しかし実際には、彼女の家庭はクレアと再会する以前から崩壊が始まっていた。ブライアンはブラジルへ移住することを望んでいたが、アイリーンはそれに猛反対した。夫と息子たちにとってニューヨークで暮らすことが最良の選択であるというのが彼女の反対の理由であった。彼女は既に享受している平穏な生活を変えたくはなかったのである（162）。またこの意見の対立を乗り越えたことが、二人の「幸せ」の土台となっていると彼女は考えていた。しかし夫婦間の溝が埋まることはなく、「幸せ」の土台は空洞であり、崩壊の火種は常に燦っていた。

アイリーンが守りたいと思っていた平穏な生活とは何だったのか。前述の通り、彼女の生まれ育った環境や、結婚後の生活は、経済的に裕福なものであり、クレアのようにより良い生活を得るためにパッシングをする必要などなかった。また息子たちがセックスに関心を持つことを嫌悪し、リンチの話題を取り上げることも嫌悪していた。彼女は、このような話題を避けながら息子たちが生活できると信じていたのだが、実際には黒人として合衆国で生きるためには避けることなどできない問題であり、この現実や対処法を教えないことは黒人の親としての責任を果たしていないことを意味した。そして彼女は、息子たちをヨーロッパの学校へ入学させるという白人上流階級的な方法でこれらの問題を解決しよ

うとさえしたのであった。このように考えると、アイリーンが守ろうとしていたものは、既に手にしていた白人中産階級的な成功であったと言える。

アイリーンとクレアはその育った環境や、結婚後の生活において対照的な人物であったように見える。しかし両者とも白人中産階級的な生活様式を追い求めていたことにおいては共通している。またその結果、クレアは身を滅ぼし、アイリーンは精神を崩壊させる。つまり両者とも追い求めたものを手にすることも、守り続けることもできなかった点においても共通しているといえる。つまり二人は、おかれている経済的な境遇や社会的な立場においては差異があるものの、白人中産階級的な価値観の実現や成功を求め、社会の中でもがきながらも、その努力が報われることはなく、最終的にはその努力のために身を滅ぼしてしまうという点において共通しているのだ。

彼女たちの人生は、白人が思い描く「黒人」というイメージから抜け出すことを求めているに過ぎない。しかし「人種」が大きな意味を有する合衆国社会において、人種の壁を乗り越えることは容易なことではなかった。また白人が権力機構の中心を独占する合衆国社会において成功とは、白人のために白人の基準によって形成されたものであり、そこに黒人が入り込む余地などなかった。そのような状況の中、黒人が成功を目指すことは人種という境界線を攪乱する行為であり、白人にとっては白人の安定性を乱す危険な行為であり、黒人にとっては人種への忠誠を危うくする行為であった。

このように考えたとき、実質的に人種の壁を越えてしまったクレアの死の遠因に夫であり白人であるジョンが存在していたことは示唆的である。つまり彼女の努力は、既得の優位性を脅かされることを嫌う白人によって阻まれていたのである。その一方でアイリーンの場合は、彼女の精神崩壊の原因となったのは黒人であるクレアや夫ブライアンが存在であった。アイリーンは既に手にしている白人中産階級的な価値観による幸せを守ろうとした。しかし彼女の行為は、クレアのパッシングを夫ジョンが気づいたことを知らせなかったり、息子たちに黒人として社会で生き抜くために必要な教育をすることを否定したりするなど、黒人という人種への忠誠を破るものであった。そのため彼女の幸せはほかならぬ黒人によって阻まれ、彼女の精神は崩壊しなければならなかったのである。

奴隷制時代から、黒人のコミュニティには仲間の成功を自分の成功のように喜び、仲間の成功のために協力する伝統が存在していた。この伝統があったからこそ黒い肌の黒人たちはパッシングという行為を軽蔑しながらも協力し、それ故に白い肌の黒人はパッシングを成立させることが可能だったのである。またこの伝統は、同胞であるほかの黒人を犠牲にしないことが前提となっており、これこそが人種への忠誠であったといえる。しかしア

イリーンの行為は、クレアの危険を知らながら沈黙するなど、この忠誠を破る行為であった。そのため彼女の生活を守りたいという願いが叶うことはなく、精神を崩壊せざるを得なかったのである。

このように考えたとき、1920年代当時の黒人（女性）が＜成功＞するためには何が必要であったのかが明らかとなる。アイリーンとクレアは、白人中産階級的な夢に束縛されることによって自身の破滅を導いてしまった。これは換言すれば、彼女たちの破滅は、彼女たちが白人中産階級的な成功、つまり黒人女性のために用意されたものではない成功を追い求めたことによって導かれた破滅であったといえる。彼女たちが成功するためには、黒人女性にとっての＜成功＞を追わなければならなかったのである。

しかしここで注意しなければならないのは、黒人女性のために用意された成功とは、黒人という人種や、女性というジェンダーに呪縛された、つまり身分に応じた成功という意味ではないということである。

合衆国社会における成功とは、権力機構の中心を独占する白人によって、白人のために構築されたものであり、黒人女性とは関わりのないものであった。あるいは黒人女性とは、白人が成功を実現するために、白人家庭の台所に閉じ込められ、性が利用されるなど、白人の成功のための犠牲にされる存在でしかなく、自らが成功を追い求める行為者ではあり得なかった。

ラーセンが『パッシング』を通じて示していたのは、黒人女性が成功するためには、他者の成功を求めながらガラスの天井を突き崩すための努力が必要だったのではなく、黒人女性が自らの意思で構築する、黒人女性のための＜成功＞のヴィジョンを示し、それを求めることの必要性だったのである。

まとめ

奴隷制時代に形成された黒人女性を性的な対象と看做す白人の身勝手な論理によって、混血の黒人が多く誕生し、白人のように白い肌の黒人すら誕生するようになった。白人が権力と富を独占する合衆国社会において肌の白い黒人は、生き延びるための手段として白い肌を活用した。パッシングである。ラーセンの『パッシング』は、白い肌の黒人女性が成功を目指しつつ、黒人であるという事実や黒人社会との関係についての不安定な心理を描いた作品であった。

ラーセンはパッシングという行為が、一方で黒人社会との決別を意味しながら、その一

方で黒人社会との連帯によって支えられた行為であることを明らかにした。また黒人社会の伝統としての連帯によって、傷ついた精神の再生の可能性をも示した。合衆国社会において黒人女性が成功を目指すことは、容易いことではない。何故なら彼女たちが目指そうとしている成功とは、白人のためだけに準備されたものであり、黒人女性が目指すことは許されていなかったからだ。そのような状況において黒人女性たちは成功を求め続け、精神と身体を傷つけなければならなかったのだ。

パッシングによって得られる成功は白人並みの成功に過ぎず、黒人として手に入れたと思われる成功もまた白人化された成功に過ぎない。ラーセンはこのような事実を描きつつ、他者から押し付けられた成功ではなく、黒人女性が黒人女性として自ら選び取る<成功>を創出する必要性を示していたのだ。

【注】

1 合衆国では一滴でも黒人の血が混ざっていれば人種的に黒人と看做される。これを「一滴の血の規則」(One-Drop Rule)と呼ぶ。このような規則を最初に法律で規定したのは、1910年のテネシー州で、ヴァージニア州では1924年のことであった。これ以後、各州で同様の規則が法律で定められることになる。それではこのような法律が制定される前の状況はどうであったのか。ジョシュア・ロスマン(Joshua D. Rothman)は『隣人の悪評』(*Notorious in the Neighborhood: Sex and Families across the Color Line in Virginia, 1787-1861*, 2003)において、ヴァージニア州では黒人であると看做されるためには四分の一以上黒人の血が入っていることが必要であることが法律で規定されていたことを紹介している(68)。この規定は、法律上は1924年までは有効であったが、以後は「一滴の血の規則」が優先されることになる。

奴隷の母から生まれた子どもはすべて奴隷とされることが、奴隷制時代には法律によって規定されていた。つまり奴隷制時代においては黒人を規定するためではなく、奴隷とは誰かを規定するために「一滴の血の規則」が用いられていたのだ。このことは、法的には白人に区分される奴隷が存在していたことを意味するが、同時に身分の区別が明確であった時代においては、人種を区分するよりも最下層の身分である奴隷を明確に区分することによって、誰がより上位の身分であるかを明らかにするほうが重要であったことを示している。

誰が権力を有するのかを示す区分は、奴隷制が廃止され身分制度が崩壊すると曖昧なものとなる。そのため改めて黒人とは誰かを示し、社会的に最下層となる者は誰か明確化することによって、白人が権力を掌握することを明らかにする必要があった。そこで「一滴の血の規則」が黒人とは誰かを示すために導入されたのである。そのため「一滴の血の規則」が法律として明確に規定されるのは二〇世紀初頭ではあったが、実際には一九世紀末には広く慣習としてゆきわたっていた。

2 ネラ・ラーセンは1891年、デンマーク系白人の母親と西インド諸島出身の黒人の父親の間にシカゴで生まれた。父親は彼女が二歳の時に他界し、その後母は白人と再婚する。白人社会の中で唯一の黒

人として生活しなければならなかった彼女は、常に疎外感を有しながら成長する。1909年に黒人大学であるフィスク大学の高等部に進学したが、この時は黒人だけの環境に違和を感じた。その後デンマークへの留学を経てニューヨークで看護学を学び、看護師として病院で働くようになった。さらに結婚や図書館司書の資格を得たことを機に、ニューヨーク公立図書館に勤務する。28年に中編小説『流砂』、29年には『パッシング』を出版し、黒人からも白人からも好評を博す。30年にグッゲンハイム奨学金を黒人女性として初めて獲得し、ヨーロッパで創作活動を行う。しかし盗作の嫌疑がかけられたことや（のちに嫌疑は晴れる）、離婚などの影響で断筆。文壇を離れた後は看護師として復職し、63年まで勤務し、64年他界。

ラーセン自身が白人社会と黒人社会を体験していたことも影響して、彼女の描く作品には自伝的要素が多く、また混血の黒人女性であることに起因するアイデンティティの不安が描き出されている。

3 ジョナサン・リトル (Jonathan Little) は「ネラ・ラーセンの『パッシング』」(“Nella Larsen’s *Passing*: Irony and the Critics,” 1992) において、アイリーンは抑圧された性的欲望をクレアに投影させていることを示している。ブライアンが同性愛的傾向にあったことを指摘しているのは、デヴィッド・ブラックモア (David Blackmore) の「不合理で不安な感覚」(“‘That Unreasonable Restless Feeling’: the Homosexual Subtexts of Nella Larsen’s *Passing*,” 1992) である。ジュディス・バトラー (Judith Butler) が『問題なのは身体だ』(*Bodies That Matter: on the Discursive Limits of “Sex,”* 1993) で『パッシング』を用いて分析したのは、人種とジェンダー、人種とセクシュアリティが相互に関連していることである。日本人による研究としては、鶴殿えりか「パッシングを超えて：ネラ・ラーセン『パッシング』における人種／セクシュアリティ」(2003) や中地幸「パッシングと人種のフォーマティヴィティ：Nella Larsenの*Passing*における身体をめぐる欲望と抑圧」(2004)、相田洋明「Nella Larsenの*Passing*読解：人種と性と階級」(2008) などがある。

4 1896年、最高裁はブレッシー判決において、「分離すれども平等に」の原則を打ち立てた。これ以降、公園やレストランなど、公私を問わずさまざまな場所が「白人専用」と「黒人専用」に分けられるようになった。この原則で示されたのは、黒人と白人を分離して扱う場合は、基本的サービスは平等に提供されなければならないことである。例えば、列車が提供すべきサービスはある場所から別の場所へ移動させることであるので、この基本的なサービスが平等に提供されるのであれば、付加的サービスである車両は分離されていても構わないということである。そして社会的に分離された人種による壁を侵犯し、白人専用で黒人が入り込むことは、秩序を乱す行為と看做され、処罰の対象とされた。

5 本稿では、白人的価値観や白人的夢などの表現を用いている。当然この白人とは、合衆国に住む白人のことである。またこれらの言葉は、合衆国的価値観や合衆国市民の夢と置き換えることも可能であり、こちらの表現のほうが一般的に用いられているのかも知れない。しかし本稿では、合衆国に住む白人が白人のために作り上げた価値観や夢を、合衆国的価値観と表現することを回避する。なぜならアメリカ黒人は合衆国市民であり、合衆国の価値観や夢の範疇に含まれなければならないにも関わらず、彼／女たちが排除されてきた事実を明確にする必要があると考えるためである。

【参考文献】

- Anderson, Lisa M. *Mammies No More: the Changing Image of Black Women on Stage and Screen*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield, 1997.
- Blackmore, David. “‘That Unreasonable Restless Feeling’: the Homosexual Subtexts of Nella Larsen’s *Passing*.” *African American Review*. vol. 26 no.3 (1992), 475-484.
- Butler, Judith. *Bodies That Matter: on the Discursive Limits of Sex*. New York: Routledge, 1993.
- Craft, William and Ellen. *Running a Thousand Miles for Freedom: or, the Escape of William and Ellen Craft from Slavery*. [1860] Ed by William L. Andrews. et. al. *Slave Narratives*. New York: Library of America, 2000. 677-742.
- Larsen, Nella. *The Nella Larsen Collection: Quicksand & Passing Plus Freedom, the Wrong Man & Sanctuary*. Memphis, TN: Bottom of the Hill Publishing, 2010.
- Little, Jonathan. “Nella Larsen’s *Passing*: Irony and the Critics,” *African American Review*. vol. 26 no.1 (1992), 173-182.
- McDowell, Deborah E. “New Directions for Black Feminist Criticism.” [1980] (青山誠子訳「黒人フェミニズム批評に向けて」『新フェミニズム批評』岩波書店、1999：227-248)
- . “The “Nameless... Shameful Impulse”: Sexuality in Nella Larsen’s *Quicksand* and *Passing*,” *The Changing Same: Black Women’s Literature, Criticism, and Theory*. Bloomington: Indiana UP, 1995.
- Quarles, Benjamin. *The Negro in the Making of America*. 3rd edition. New York: Collier Books, 1987. (明石紀雄ほか訳『アメリカ黒人の歴史』明石書店、1994)
- Rothman, Joshua D. *Notorious in the Neighborhood: Sex and Families across the Color Line in Virginia, 1787-1861*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2003.
- Showalter, Elaine. ed. *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*. London: Virago, 1986. (青山誠子訳『新フェミニズム批評：女性・文学・理論』岩波書店、1999)
- Smith, Barbara. “Toward a Black Feminist Criticism.” [1977] (青山誠子訳「黒人フェミニズム批評に向けて」『新フェミニズム批評』岩波書店、1999：195-225)
- 鶴殿えりか「パッシングを超えて：ネラ・ラーセン『パッシング』における人種／セクシュアリティ」鷺津浩子ほか編『イン・コンテクスト』佐藤印刷、2003：20-33
- 相田洋明「Nella Larsenの*Passing*読解：人種と性と階級」『言語文化学研究 英米言語文化編』第3号（2008）：41-51
- 中地幸「パッシングと人種のパフォーマティヴィティ：Nella Larsenの*Passing*における身体をめぐる欲望と抑圧」『日本女子大学英米文学研究』第39巻（2004）：19-33
- 風呂本惇子『アメリカ黒人文学とフォークロア』山口書店、1986